



謠曲拾葉抄

漢 樂府詩集  
卷之十  
雜詩  
上

平





葵上



此は源氏葵、葵をみく他方のなり。彼葵を  
葵と称するなり。花名源氏源典侍が葵  
「むらやんのうごせり葵の木のあやしのをを  
源氏君のあしよ

「うごせりなるをみくは葵の木のあやしのをを  
依而以此哥為卷名ヒキイテオトひと

葵、よとくひ引入大后の御子也。母はさうりつがの帝  
同服の御妹。之の宮とくひ源氏の御子也。  
あうとめ之。源氏十二景の御時。清涼殿の東  
乃ひさしよとあえ服の御子なり。則引入大后















六根清淨被集説六根眼耳鼻舌心意也六物發出  
之底根含牙之底又云根即心也枝文目諸乃不  
淨乎見天心在諸乃不淨乎不見下五根准之清淨  
有内外之二内守心之義外脩身之義下略

▲寄人の今をよりより長溪のあゝ毛の約よみ思ひ

先代旧事詠歌本紀云御託歌

寄神者今底寄与來長濱干芦毛之駒干手細揺懸

師ぞ書云寄人の寄神た降童たえ或は生具死

具を祈り時彼具のうりよ童子を侍へむと祈

つげ降童ささるるふこ或は具を人取よ侍り

まくるるささるるふこ或は具を人取よ侍り

よくほ川に流るるもよき此方もよきホのふり

よありとんきより長濱の近はいつくもあき

ホの名もよき一降童のふり此法度たおも有

るふこ弘法大師の外法傳おもよきさうり

物營記云神子此方をとるふくと具とよきさうり

▲三ツの車よ法の弘法大師の門とよかおれん

是は法苑珠林の文の意と毒く邪端梅よは

▲夕歌の宿乃中道車やうりささるるふり

夕歌の夏世新よおよりささるるふり但此夕歌を

もは息不病とよきひくおさうり

とよき合はれぬ



福林寺の百首

○ちひやうくこのるゝれちうらんや車道のりあふハ為氏  
浮世ハ牛の小車乃ちりや報ひらうらん

是ハ譬喩品の文乃ちきこひ別のもて。百首小法を

▲九輪廻ハ車の悔乃ちとく六趣に生をかやうん

行者用心集云解脱云為此身造量惡業經歴六

趣四生如車廻庭 矣 六趣といふは也母を系し後を

四生者俱舍論曰諸有情類有四種生卵生胎生濕

生化生如孔雀等生從卵殼如牛馬等生從胎藏如

飛蛾等生從濕氣如諸天等諸根頓具每而歎有是

名化生 矣 十二因縁経曰有四種生一腹生謂人

及畜生胎生 二寒熱和合生謂蟲蛾蚕虱 濕生 三化

生謂天及地獄四印生謂飛鳥魚鼈 矣

○六乃乃此のちりくこのきをころりいへく脚けりて行

▲人るの不定芭蕉泡沫の世のうらみ

随願往生経曰此身如芭蕉中並有實 矣

維广経曰是身如泡不得久立是身如芭蕉中並有

堅上 矣

夫木 凡此のうらみやまを芭蕉のきをてかとも散りてせう西

多 河波の流はうらみやまの泡の消るゆるもらぬるの世の味急

▲このふの花いろふの多のくゆるうぬて愚るれ

白氏文集十九云昨日榮華今日衰轉似秋蓬並定

处长於春夢幾多時 矣 陳孔璋語云昨花今日

卷六

六







妻戸とハヤリ戸といひて。左右二枚の戸を  
妻おしせよひくことつるやうよあつるを  
人くくあ舎のもしくまのり。ゆりしつた一枚  
ひくこの妻戸しつるもろ

▲准元ふくぬ上臈の破車二車よる色くろよら女  
房とわりし人の

まら女房ハ友らまこせ。高侍とき小印ト。上  
よの齒よ鐵漿と付くると。鐵漿付ちくえト  
臈ハ齒のゆるりれい白齒者しつと。ふら  
敷し。應仁記云天下の成敗と友外よれせと。  
兵衛臺所。香樹泥。表目の局くく不

非不知給公事ま女房。傍以兵尼くらのもの  
とく上下畧  
管見記云永享五年三月十日昔

女等参差我念佛。上臈ハ志賀よはと

▲轅ハ陽宮小波と。よめぐハ友戸よはと。婆波女ハ  
田村よはと。電光ハ柏崎よはと。御息所ハ那ノ  
宮よはと

▲もよとの花宴。源氏其の名よ花の妻とま  
源氏伏巻よはと

▲仏洞の紅葉の秋乃夜ハ月ふくあき  
紅葉の賀。月の妻とあきせしりきハ流の  
御遊よひくくハ源氏伏巻よはと



仙洞といふ藪姑射山と云ふ。仙人世に居るを  
莊子逍遙遊篇より云ふ。帝ありぬを修ふ  
流の流と云ふ。世に仙宮よなくと仙洞と云ふ。

海人蓬萊と云ふ仙洞といふ。号するを修ひて後より也。  
未定下るる時海に下るを上天の宮下をいふ号  
と申す。八雲御抄に云ふ。仙洞と云ふ。

下学集云姑射山指仙洞也姑射山仙人之所居也  
祝以謂院居也矣 本朝文粹十一云 源順

峩峩我院者我先祖太上皇之仙洞也 下畧

▲衰へぬまの槿の目新侍るのまを振る

松山下 志のりふ起つとらん槿の目新侍るの終なるん

▲相うさの如き色の早蕨のりふあそめしあひの家

野相公詩 紫塵嬾蕨人拳手碧玉興芦錐脱囊 集詠即

と句よ紫塵と云ふ。早蕨ハ紫の塵のわらやう  
るまじい。嬾の字一統りのまじく流り。世に相うさ

マ流歎。堀河流石そふ修理を文顯季に  
早蕨と流るる。あふ

▲紫乃塵亦拂ひまの形ふあそる蕨の相うをわく  
相うと云ふ。早蕨のまをわらうるやう也。

つとらうあるま色のつとらうをよんぬこ  
下句ハ芦の角継あそる。まじい。あまは  
流のまのまじい。初てあゆより振ある



ハ雅の袋と愛と。括あつらふ似らるる事

撰集抄云野相公遊玄の後唐より樂天の侍た

とあくさつらるふものうとて藤人をもあまら

きとて芦雅あつらふをたつとて侍ゆらん

おも管望の侍よとのりど。何ハ秋あいうりまら

時の遠文のうとてPなるハ。篁の句ねめてとて

ぞやめつへたりとて

▲あひあつたせし侍ハ人のあつた

情あまハ情ハ人のあつたとて人ともあつた

▲あ人のあつたつられあつたとてあつた

。あひあつたあつたつられあつたつられあつた

▲あをあけくそあつたあつたあつたあつたあつた

去昔抄云あつたあつたあつたあつたあつたあつた

らとてあつたあつた

勅宮撰秋合秋阿刺云あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

▲ういあつたあつたあつたあつたあつたあつた

秋凡

日本紀云神武天皇御孫小宇破奈利とあり

伊呂波字類抄云 後妻 後女 婿と云

倭名抄云類氏云後妻必思前妻之子

史記呂后本紀曰七年正月太后召趙王友友以諸











議境二起慈悲三巧安止觀四破法遍五識通塞六  
修道品七對治助開八知次位九能安忍十在法愛  
也見止觀第五是皆現行有り云云十年來也  
大平記云十二之延曆寺第十之座主法性  
坊云云意贈僧正四明之上十來の座の云々  
照觀月清心水清淨一々る小上下畧

瑜伽の法水と密の月ハ各喻也。 瑜伽梵語此  
云相應瑜伽師地論云謂一切衆境行果等所有  
諸法皆名瑜伽也 三密ハ菩提心論曰

取言三密者一身密者如結契印召請聖衆是也二  
語密者如密誦真言令文句了々分明在謬誤也三

意密者如住瑜伽相應白淨月圓滿觀覺口提心也  
修驗抄云三密者一身密二語密三意密云之三業  
也又云教勤三密行滿六度位也

▲行者ハ加持多ク人ト 行者ハ釈氏要覽云經  
中多呼修行人為行者也 加持ハ即身義云加持

者表如来大悲與衆生信心佛日之影現衆生心水  
日加行者心水能感佛日各持也 百法問答抄云

加持者何義耶答云加者加被也謂結在義文詞以  
神力加被自所證妙理也持者攝持攝受內證功德  
故也矣 大日經曰神變加持也

▲後、行者の跡云々 安名云々



胎金<sup>タイキン</sup>ふた部の事とすけ 百因縁集云太峯名胎金  
兩峯也矣 又云熊野山胎藏界因曼荼羅金峯山  
金剛界果曼荼羅<sup>コンゴウカイカクワ</sup>矣 一云北叡山東塔ハ金剛界  
西塔ハ胎藏界横川ハ蘇悉地<sup>ソシチ</sup>峯ニ表すこゝ  
此うゝひの<sup>ヒ</sup>をハ横川よりおこさば此後家小の  
うゝ小軟

金胎两部傳來之夏金剛界ハ三宝感應錄曰昔金  
剛薩埵親於毘盧舍那佛前受金剛界大曼陀羅法  
義後數百歲傳於龍猛菩薩又數百歲之後傳於龍  
智龍智慎傳持之如瓶水<sup>ツツミテ</sup>移器傳金剛智<sup>ツツミテ</sup>下畧

佛祖統記云東夏以金剛智為始祖不空為二祖慧  
朗為三祖不空弟子有慧果者日本空海入中国從  
果學皈國盛行其道矣

胎藏界ハ三宝感應錄曰毘盧遮那如來說大悲胎  
藏曼陀羅王救護一切衆生金剛手傳受佛教經數  
百年傳付中印度世岳寺達大掬多多謹傳弘付  
解飯王五十二代玄孫釈善岳畏々々開元七年從  
西國將曼陀羅圖來此國於玄宗皇帝朝為國師翻  
訳大教曼陀羅設大道場本朝傳教大師貞元九一  
年如越州龍興寺逢順曉阿闍梨受此善岳畏密教  
矣 右ふた部の傳來ハ明州諸軍事采陽鄭審則題  
記よりすこゝり又宋之傳傳よ委

胎藏下

古



▲條録 善法下流を

▲不淨を濁り忍辱の袈裟

忍辱袈裟者法華法師品曰如来衣者柔和忍辱心是也 袈裟ハ名義集云具云迦羅汝曳此云不正色從色得名章服儀云袈裟之目因於衣色如經中壞色衣大淨法門經曰袈裟晋名去穢大集名離深服賢愚名出世服真諦雜記曰袈裟是外國三衣之名名含多義或名離塵服由斷六塵故或名消瘦服由割煩惱故 此等文ハ隔不淨之心也 忍辱者天竺云羸提此曰安忍法界次第云秦言忍辱内心能安忍外所辱境故名忍辱 矣

本論曰善心有二種有麤有細麤名忍辱細名禪定未得禪定心樂能遮衆惡是名忍辱 矣

▲赤木の珠敷の多放と 赤木の珠敷ハ梅の木或ハ紫檀より作りしと云ふ多放ハ天竺より作りし粒の散らるるの實のこころまことの多放ハ粒がーらいさく粒の角よりと云ふ

修験抄云寂多角念珠形下々劔崎表智劔智者智惠也菩提也 是則並明斷破義也 矣

▲東方小降三世明王 下畧 丑大明王ハ每年冬より降

▲曩謨三曼多縛曰羅赦戰拏六訶盧灑那娑婆叱耶咩 怛羅叱哈唎 乞ハ不動の慈赦の呪也 不動經よ

是矣上

五五







つ。七日このりて、<sup>子</sup>母命頂礼。其船ちぬ林。  
 取<sup>子</sup>い七日このりて、<sup>子</sup>ある。いよ。あを<sup>イ</sup>とせなう。鬼  
 神よな。い。たび。神。い。い。い。つ。女。  
 死<sup>コ</sup>殺さん。と。い。の。り。り。明。神。表。と。か。り。ん。  
 依<sup>コ</sup>よ。尸。如。ふ。役。こ。ま。こ。鬼。よ。あり。さ。く。い。海。を  
 改。く。宇。治。の。川。瀬。よ。り。て。と。七。日。ひ。い。れ。と。示。現。  
 女。母。房。住。く。都。は。神。り。人。を。さ。あ。よ。こ。り。り。て。  
 長<sup>キ</sup>る。る。後。と。い。あ。川。よ。り。け。角。ふ。が。ゆ。り。り。り。親。  
 二。年。と。さ。い。男。よ。い。丹。と。わ。り。珠。揚。と。い。と。と。  
 三。川。の。是。よ。い。松。と。り。松。明。と。い。ら。ん。と。  
 女。方。よ。大。を。付。く。り。ふ。く。り。つ。教。父。人。あ。川。

あり。と。後。大。和。大。修。く。走。出。あ。と。持。く。り。い。ま。六。  
 既。より。あ。川。の。火。を。え。つ。ら。眉。や。く。く。糸。ら。ら。  
 介。と。る。面。赤。く。男。も。あ。り。け。色。い。さ。ら。う。鬼。形。  
 よ。こ。と。う。い。ど。ま。と。り。人。さ。も。魂。と。い。い。い。  
 と。あ。色。脚。死。せ。と。と。ら。ゆ。ら。り。り。り。う。く。の。こ。  
 と。く。い。と。く。宇。治。の。川。瀬。ふ。ゆ。と。七。日。ひ。い。り。  
 々。色。い。美。和。の。社。の。と。う。い。ひ。ま。く。い。ま。い。り。  
 鬼。と。り。り。又。宇。治。の。橋。如。と。い。是。成。一。い。さ。て。  
 病。と。い。い。と。あ。女。と。い。り。あ。と。と。い。い。男。  
 乃。親。親。上。下。と。い。も。う。ら。う。と。男。女。と。い。い。り。と。  
 女。不。病。う。が。死。者。ふ。文。畧。















一云の原をさしぬくはるはもあふゆといふは  
此方とのつつけり 古今系推抄をさしぬ  
さるうし。かきりし。く唱はも。あふゆといふ  
くろひのふと。ういりやのる人のゆしと  
いひさるは。ねは林よ。さるうといふ。さるうハ僻  
た離たさる

▲清明のりく小立越多の松ともうらなせと  
ない 従四位上安倍清明ハ仲麻呂九代孫父ハ  
大膳大夫益材と号と。帝王編年記云安倍清  
明一条院時人也掌天文曆數其昔者一家兼兩道  
而賀茂保憲以曆道傳其子光榮以天文道傳其子

清明自此已後兩道相分矣 讚列地志云清明讚  
岐国香東郡由佐之産也 矣

今昔物語云清明ハ賀茂忠行ガ弟子と云

▲茅の人形と人形と  
茅萱と云くはる人形也。後より時ハ搦物とい  
なり。源氏物語云ふなり。人形とい其人の長  
よ人形と云ふこと

▲三重のち棚五色の幣 三重のち棚ハ考。但  
五色の幣小對しと云死 或云五色幣ハ紙  
と五色と漆と幣ハ本と云ふこと。是と云ハ幣  
カ云。五ノ行幣ハ其頭紙の象 青赤黄白黒如也



▲肝膽と摧ツギとツギりツギり 肝ハ五臟シヤクの一ツギ。膽ハ六腑シヤクの一ツギ。小腸シヤクも六腑シヤクも摧ツギけツギ破ツギくツギ後ツギもツギ入ツギてツギりツギ。 往生要集云志シ雖レ春ハ肝膽力不堪ス水ハ芥ニ矣ニ。

▲安国論云摧肝膽ツギ弥ツギ逼ツギ飢疫ツギ矣ニ。

▲謹上再拜 跋通ツギよツギ後ツギと

▲夫天開ツギけツギ比ツギこツギまツギりツギ一ツギよりツギ以来伊奘諾伊奘冊ツギ尊ツギ之ツギ磐ツギ金ツギ少ツギしてツギこツギのツギまツギりツギひツギりツギ。

つゝりり 神代卷日二神於是降居彼嶋因欲共ツギ。

為夫婦ツギ産ツギ生ツギ洲ツギ国ツギ便ツギ以ツギ碓ツギ馭ツギ廬ツギ嶋ツギ為ツギ国ツギ中ツギ之ツギ柱ツギ矣ニ。

伊奘諾伊奘冊尊ハ天神第七代目の神也。

旧事本紀云天帝去来ツギ諾ツギ尊ツギ又ツギ天降雄亦神生雄矣ツギ。

天后去来ツギ冊ツギ尊ツギ又ツギ天降ツギ姫亦国生ツギ婦ツギ矣ニ。

纂疏云伊奘諾伊奘冊尊七代耦生神伊奘者猶言去来和諾也諾父母母也此二神住来於二伎之間而為造化之父母矣 古今系雜抄云伊奘諾と

とてと縁とまうくとまうと。まとのと縁とまうととて縁とまうと。伊奘冊とまうと縁とまうと。おさひとまうと。まのまうとまうと。一女之男とまうとけ縁とまうと。



天の懸念の補代、あふ天懸座とせ  
 直指おえ天の天とせとせ。懸の懸夜のうとせが  
 ことく。帝位の不監とせ。賢國の義とせ。く  
 座のまこ。る所座のるこ。荒遠抄よの天と厚  
 座とせ。あまのつとくともありき

ことこのまくともいふ男女のまどりりとも  
 旧事本紀云夫婦始相婚合成生産事是夫婦別其  
 法也矣 日本紀は適合神合為夫婦とせ。

旧事本紀は會將交交通とせ王仁と交通指兩  
 気合合矣 万葉和名秘傳抄とせとのまく  
 といふのまくあり。昔賤のれが人の内ふまは

まろりが同じそ及の内の下女は彼男とせりて  
 彼女の臥床へまひくまろり。此女の柶家へは  
 及の幕とせりて移まろり。彼男まろりの  
 下まろりまひまろり。そ付まろりまろりのまろり  
 ついともいふ仁傳抄とせあり。そのお女のま  
 「君のやまの婦なまろりのまろりのまろりまろり  
 和云此言万葉集へ入

或云まろりのまろりついでまろりのまろり  
 云義と。まぬと掃くまろりついでまろり  
 まひまろりついでまろりまろりまろりまろり  
 まろりまろりまろりまろり。昔の男女のまろり

夫有







宣下於山城國愛宕郡如意峯神祇存場所奉安鎮  
三十一百廿二座之神体。同日廿八日奉渡神体於  
六十余座矣。天下諸神奉投神号之時以神代正印  
被定神宣事延喜己未聖断也矣

帝王編年記云天神地祇惣三十一百三十二座

大四百九十二座  
小二百六十四座 神祇ハ天神ハ天孫トシテスル

降降ト云々。或ハ一交王位トシテラ降降ト云々  
神ト云々。祇ハ地祇トシテト云々。或ハ一交王位トシテラ降降ト云々  
云々の祇ト云々。或ハ一交王位トシテラ降降ト云々

周礼曰大宗伯掌天神地祇之礼然天神曰神地神  
曰祇也矣 孔安国孝經傳曰天精曰神地爽曰祇

判佛菩薩明王部天童部

諸佛菩薩ハ蓮花部上首觀音也。明王部ハ五大  
尊ト云々。亦亦々々ト云々。天童部ハ法天の  
中ト云々。或ハ大黒天。亦財天等也。

▲九曜七星 九曜ハ日曜星。月曜星。木曜星。火曜星。

土曜星。金曜星。水曜星。羅喉星。計都星 矣

大月修小九曜ト九執ト云々。或ハ九曜ハ北斗ハ

七星ト加金輪星。妙見星為九曜 矣

七星ハ北斗ト。委々湯谷ト云々

三十八宿 春秋傳曰二十八宿分在四方方有七

宿共成一象。虫獸在地有象在天東蒼龍西白虎皆

失命



南首北尾南朱雀北玄武皆西首東尾從角起而左

旋矣

東宮蒼龍七宿

角亢氐房心尾箕

南宮朱雀七宿

井鬼柳星張翌軫

西宮白虎七宿

奎婁胃昂畢觜參

北宮玄武七宿

斗牛女虛危室壁

宿の多 說文曰宿止也矣

瑯琊代醉曰馬永卿

曰二十八宿謂之二十八舍又謂之二十八次次者

舍也皆有止宿之意矣

或ハ又宿の字と秀の音小月也二十八宿の

まゝく去集經小引り

▲男の色よくくくくくく

百緣經曰太衆嘿然身毛堅矣 清淨覺經曰善男

子善女人閱說淨土法門心生悲喜身毛為堅如拔

出者當知此人過去宿命已作佛道也矣

夫琴のものをこころざしむせむたそま毛ふよくらぬるる

至くおろりしむせむたそま毛ふよくらぬるる

女の色のよくくくくくく

▲女の色よくくくくくく

風よりり月よふふふふふ

朗詠集慶保微雨自東來

斜脚暖風先扇處暗声朝日未晴程矣

夫命











三十三番神 諸神記云明七種番神第一天地擁護三十番神第二内侍所三十番神第三王城守護三十番神第四吾国守護三十番神第五禁闕守護三十番神第六法花守護三十番神第七如法經守護三十番神 天地擁護三十番神及内侍所三十番神深

秘之由也王城守護三十番神青竜朱雀白虎玄武之八神王城之四面封之擁護之吾国守護三十番神第一天神与地神第二日高与太元第三番夜司与晝司委細畧之禁闕守護三十番神一日墾田二日誦

三十日吉備也委細畧之法花守護三十番神六比叡小比叡聖真子客人八王子右之五神山門鎮護之

冥神也此五神六日宛守護此經如法經守護三十番神下日伊勢二日石清水晦日氣比也委細畧之

已上諸神記 文畧 叔良正勸請の三十番神ハ在之禁闕

ち獲の番神は同一。高宗日蓮ハ卜部益益

うろお侍良正の教小者ハ存く叢林の

魚鬼の神通通力自在のつとむり

神通者 瓔珞經曰神名天心通名惠性天然之惠

徹照在礙故名神通 大涅槃經云六神通と夜

尸法花は十八林と云ふと云ふ 鳥獸鬼神の通ハ

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天



忍<sup>カ</sup>就<sup>ト</sup>得<sup>ト</sup>通<sup>ト</sup>又<sup>ト</sup>業<sup>ト</sup>通<sup>ト</sup>凡<sup>ト</sup>分<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>凡<sup>ト</sup>ソ<sup>ト</sup>ひ<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>り<sup>テ</sup>乃<sup>ト</sup>  
邪<sup>ト</sup>通<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>ハ<sup>ト</sup>別<sup>ト</sup>と

自在者 唯攝論曰有十種一壽自在二心自在三  
莊嚴四業五生六解脫七欲八神力九法十知<sup>ト</sup>矣  
八十華嚴三十八曰一命二心三身四業五生六願  
七解八意九知十法<sup>ト</sup>矣

或ハ又ハ八つの自在あり。阿含大經等も然<sup>ク</sup>  
阿<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>ハ<sup>ト</sup>車 湯<sup>ト</sup>答<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>然<sup>ト</sup>と

月<sup>ト</sup>小<sup>ト</sup>乃<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>ぬ<sup>ト</sup>鬼<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>ふ<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>

古今假字序云月小乃しぬ鬼神ともいふは  
あ<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>せ<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup> 是<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>つ<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>

安達原

奥別名取郡安達原小黒塚と云ふ。多村の中小黒  
塚とて柏<sup>カシ</sup>の木乃村とく其跡跡も有り。此處と黒塚凡  
そ<sup>ト</sup>り。拾遺集雜下小黒奥小名取郡黒塚と云ふ小  
重<sup>シメ</sup>之<sup>ニ</sup>が妹あ<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>字<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>ひ<sup>ト</sup>つ<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>カ<sup>カ</sup>子<sup>モリ</sup>多<sup>カ</sup>重<sup>モリ</sup>

淡奥の妻をが原の黒塚小鬼こりねと云ふの伝<sup>ト</sup>

大和郡信小<sup>カ</sup>此<sup>カ</sup>旁<sup>カ</sup>の下<sup>カ</sup>句<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>伝<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>。又<sup>カ</sup>烟<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>小  
多<sup>カ</sup>重<sup>カ</sup>堂<sup>カ</sup>凡<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>閑<sup>カ</sup>院<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>山<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>あ  
ふ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>黒<sup>カ</sup>塚<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>不<sup>カ</sup>伝<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>。其<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>  
よ<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>せ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>。或<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>閑<sup>カ</sup>院<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>清<sup>カ</sup>和<sup>カ</sup>天<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>  
の<sup>カ</sup>山<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>貞<sup>カ</sup>元<sup>カ</sup>親<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>号<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>。此<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>山<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>多<sup>カ</sup>重<sup>カ</sup>伝<sup>カ</sup>と

安達原

一



尸、子と重之と云。鬼といふ女と云。宝積経曰女人地獄、  
使能断佛種子外面似菩薩内心如夜叉兵龍猛太  
士曰外面似菩薩内心如羅刹兵ケ所の倍小よりて女  
と鬼と云々々々今葉古と相倍小は倍の倍ありさか  
此倍は倍盛が方及彼ちと相倍小よりづとそ倍あり  
▲縁の衣は縁無の縁ありと神々志ありん  
縁掛ハ葛城小江と

▲是ハ那智の東光場の阿闍梨祐孝とい我りなり  
東光場乃阿闍梨祐孝ハ那智の聖と云々  
傳記未考。於智ハ舟橋小江と

阿闍梨者慈覺大師蘇悉地經分別阿闍梨品疏曰  
言阿闍梨者周法師云此梵短声也翻為正行以此  
人能化弟子之行故涅槃經第八云阿闍梨者義何  
謂於世間中得名聖行有者也長声呼云阿遮利耶  
翻軌範師兵伊呂波字類抄云阿闍梨清和天皇  
御宇貞觀元年己卯始置之或書文德天皇御時被  
始置可尋兵

▲捨身ハ自然居士ノ法也ハ依ハ安宅及舟橋小江と  
抖擻者頭陀也 釈氏要覽云梵語杜多漢言抖擻  
謂三毒如塵能空汚真心此人能振掉除去故今訛  
稱頭陀兵



▲糸野順礼廻必の管<sup>シカク</sup>穀門<sup>チヒ</sup>の習<sup>チヒ</sup>あり

昔ハ糸野山依六十余石をめぐり。法苑經を一本必  
一不宛納一之。是ハ弘法修好の事ありありあり。  
穀門の管といふ也。穀門といハ穀氏といふ也。  
弘法と修好といふ人の管。穀の門を築なりといふ  
ふく。穀門といふ也。

▲行脚 屋嶋小波を

▲我本山と立あぐ。想る山依小波山ありといふ也。

聖護院山下乃山依を奉山といふ。と空院山下と  
高しといふ。但、安少く奉山といふハ。糸野を指す也  
分り来ハ紀の路りと塩崎の浦とさうさく

塩のさすといふけり。南紀云塩崎浦ハ紀別

牟婁郡塩崎の庄と野村の西南六町計<sup>新</sup>海濱を  
えく。又、潮の所<sup>新</sup>崎<sup>新</sup>片<sup>新</sup>えく

▲糸乃<sup>新</sup>後<sup>新</sup>の折<sup>新</sup>ハ、糸と織といふけり。又糸の浦<sup>新</sup>ハ  
○小綱<sup>新</sup>門<sup>新</sup>綱<sup>新</sup>のうけ<sup>新</sup>後<sup>新</sup>よりめ<sup>新</sup>り<sup>新</sup>と<sup>新</sup>さ<sup>新</sup>と<sup>新</sup>ある<sup>新</sup>塩<sup>新</sup>崎<sup>新</sup>の<sup>新</sup>

え。糸野云糸の浦ハ紀云牟婁郡形智の庄。諸の  
糸付の糸の海濱長十二町計とさく。

日本紀云神武天皇獨坐皇子手研耳命<sup>新</sup>帥<sup>新</sup>軍<sup>新</sup>而<sup>新</sup>進<sup>新</sup>  
至熊野荒坂津<sup>新</sup>亦名丹<sup>新</sup>因<sup>新</sup>誅<sup>新</sup>丹<sup>新</sup>敷<sup>新</sup>戸<sup>新</sup>畔<sup>新</sup>下<sup>新</sup>畧<sup>新</sup>

又同云牟婁郡長崎の庄。長崎村の東一里半  
よ同名あり



知のの風ハ勇ホあめル 知ハ知教ク

若 秋多きといくもあしひしこの後知の風は後知也

河くまめるの生涯や

老子曰生猶如涯カキリナリ 韻會云涯水際也

莊子曰吾生有涯カキリナリ 無題詩集云周光詩生涯七

十少餘喘矣

ゆるげ旅寝のるまは今宵少の後後せん

るまはとい旅寝と 古今実校州云旅のるまはと

えり又ハたろ旅さ人の知あはるのるまはと知ふ

とらゆありさんハ漢書註ハ漢高祖項羽

軍せし時頂羽多を法びく知と志かり

倫寧遠行記昔頂羽深野旅寝結草為枕過夜今

倫寧遠行旅泊撒片敷送二月中野

されハるまはと云ゆまはより始するまはと

玉 〇るまはは細小まひあく多れ旅後の旅後しつらん

とらんといさそが休某のふ少くありつらむ又

知よあふふの又あひらととさすのふあひら

知くもつらと。或えさすのふ有繋のまは。繋

約京留滞くうら。つらむととまらむしむ一方

よよりちてととくけととく。又えさすのふ

よりま。流石光ま。るふととわりと流石の















眞山の日蔭のうらうらひくまへつゝまゝとらんまひさ  
かえ後の降生はふりまうらひ糸毛の車し結さけ 和久

是はかえ後の葵系糸のものとぞく。降生所ハ本宮の  
乾の方へ。或ハ假寝野を色たそ。故院假殿の四  
く。葵系糸ハ流連と引取く。花鳥繚情云とあれ  
ハ玉依那の別雷神とぞく糸糸とつゝま。降生  
たそ。則くこらと取リしつゝる糸糸取たうり

河海抄云賀茂祭前日於無跡石上右神事

号御形御阿礼者御生也 矣 注進畧記云加毛神

日向襲ヌ小大流リ坐ミて。漸ヤ心背の忌田ト後ニ

天の忌糸と漕ユキせ流ユキ放ユキしくユキら。と所と

降生所とつゝま

勅撰ふり振うりのみあとの葵系糸つゝまも流るり糸糸蓮

職原抄大全云絲毛車者内親王内命婦更衣以上

之処兼之車也車軒下葺庇曰庇差以白糸装車屋

上曰絲毛也 矣 海人藻芥云糸毛車賀茂祭日典

侍衆之渡一條大路也 矣

る根うらうらひ後流のうらうらひ糸糸の車とわれ流つ

▲うらうらひの浦糸糸糸のうらうらひ糸糸の車とわれ流つ

明石の浦ハ後流の名取られた。室ハ只うらひ糸糸

糸の流河とつゝま

うらうらひの浦糸糸糸の流の浦糸糸糸



詞林采葉云明浦といふ赤く云々。日本紀小  
仲功を后之韓と征して都へ皈す小仲哀云  
皇の弟子。庶弭坂王。忍然王。二社の王ハ弟才譽田  
天皇太子小立流ありと云々。攝六、由よ  
久皇の心腹と築まひと云々。此浦小赤石  
と云いひく流と云々。飯廂と核を云々  
と。皇太子と入まひ。此核を破く討ま  
らんといふ。此核を破く討ま  
五と忽より殺し。忍然王ハ軍と云々  
山背小流り其れより以て瀬田の後りて付  
まはる。云々赤石を運て積り下る。ハ赤石の  
浦と云也。已上

膿血

膿血ユウケツ 融滌ユウテイ 一

膿血ユウケツ 説文曰膿腫血也

釈名曰血滅也出於肉流而滅々也

融滌ハ説

文曰融炊氣上出也徐曰鎔也氣上融散也

廣韻曰滌淨也 周礼註曰以水和而沃之

九相詩云膿血忽流爛壞腸

真穢

真穢シンタイ 臭穢シウタイ 一

臭穢ハ礼記註疏曰臭通

於鼻者謂之臭 正義曰專以惡氣為臭

廣韻曰穢惡也 增韻曰汚也

肪脹ハ説文

曰肪肥也 説文曰脹腹大也

廣韻曰脹滿

也 九相詩云朝見肪脹爛壞貞



▲膚臆フクニこもく爛壞ランなり 膚臆ハ韻會曰膚皮也矣

説文曰臆上肥也矣 爛壞ハ説文曰爛熟也矣

説文曰壞敗也矣 廣韻曰自破也矣

▲胸ムネとこころの心 胸ハ心の臆こもく

源氏 〇むとらわくこころむむの若くさふあひあはるかの

▲咸陽宮の燈ハ紅雲符よほと 鬼一口ハ通小町よほと

▲東方よ降三世明王 南方小軍叱利夜叉明王 西方よ

大感徳明王 小方小金剛夜叉明王 中央よ大日太聖

不動明王

右五大明王ハ委く舟希まよほと

▲唵オン呼フ嚕ロ々ク旋セン荼タ利リ摩モ登トウ枳キ 是ハ茶那の真言也

▲阿ア囉ラ吽ウン 是ハ大日の呪也

大日經三悉地出現品曰阿味囉餅欠矣

義釈六具緣品下曰阿鉢覓吽欠矣 唵字ハ如來の

あくく之方とあり

秘藏記云唵字有五種

義一 歸命二 供養三 驚覺四 撰伏五 三身矣

守護經云唵字毘盧遮那佛之真身一切陀羅尼母

又中央大日義可思之矣 蘇嚕訶ハ決定之義也

悉曇藏曰娑嚕訶 志婆訶云也

▲吽ウン 羅ラ吽ウン 干カン 唵オン 是ハ不動の呪也 夢上小あり

▲見ミ我ガ身ノ者ハ矣ハ菩ボ提ト心シ 聞ク我ガ名ヲ者ハ斯レ惡ク修メ善ク聽ク我ガ説ク者ハ得ル

大智惠知我身者即身成佛

安達原















張樊と葬ふる墓と。 説文曰墳墓也方言冢秦

晋之間謂之墳 礼記註曰土之高曰墳 矣

▲往復のりく往のり也 往復とい往く復くると

と云ふ。死しつゝ人なりと名をりふも及ばざ

と云ふ。 宗徳經五大牙十三日夏大為冬世

氣往復上下畧 盤谷序云繚而曲如往而後 矣

山谷注云回旋往復 矣

▲持佛堂小あり 庭訓往來云可立槽皮膏持佛堂

矣 源氏橋姫書云持仏此はくさりゆと云

せしむせゆひとく

▲要正志流くへと像本像のりくともく

日本紀云用明天皇元年自百濟國奉畫工白加是

畫工之始也 矣 曰事本紀云欽明天皇十四年五

月於和泉國茅渟海中奇異樟木天皇奉問於五十

大神及三輪太神而令作佛像二軀今在吉野寺放

光禪像是也吾國造佛像是始也 文畧

▲天長刀 長刀ハ日本ノ武器歟倭名抄云唐令曰銀

裝長刀和名之路加祢都久利乃奈加太遲 矣

長門本平家物語小薙刀と云

▲柱杖小ありとざり杖の杖 柱杖ハ傳家小月ありと

友換のお懸しとる具ハりて出たゆふ此合



ぬ終の持はいりふとどうあると

十誦律曰佛聽蓋杖其積用鐵為堅牢故斯蓄行李

之善助也矣 毘奈耶曰佛聽蓄柱杖有二因緣一

為老瘦無力二為病苦嬰身故矣

さんいんは偏いひていづれ初後人の者少くいり

初後心といひ初めく菩提心と後起とあり

大論曰若初發心時誓願當作佛已過諸世間應受

世供艱矣 四教儀集解曰初發心者初住位中用

発本性三因成三身也故正因発成法身也了因発

成報身也縁因発成應身也是八相果殊妙覺也矣

△壹井者墓赤坂とくくそ里くハおかりんた

壹井ハ赤坂村のころくハあり。赤坂ハ赤坂

村の赤小名。ソつとも不破郡之。昔ハ壹井赤

坂と回く宿驛之。今ハ小里之

大和本記云日本武尊倭吹山の穴院乃誰と云

知りん為小迹（ゆり）ゆり又清水小跡是と云

知りん為小迹ハ初めハかー有るが為跡是と云

次ハ流ひー時より。此井小水満是なり。仍

其処を足井丸号と云く

一条禪園英流乃記云何のころと云ハ壹井あり

云々云々。名寄小者墓の里と云ハ此のころ也

詞花

○若込壹井のありありゆりゆり新嘉身と云る

狂隆

熊反

五



墓 魯人の情をまうらんとせむるあまの里

こやとの社 ち墓の辺ありり 音んこと

山賊夜盗の盗人等 説文曰賊敗也害也 矣

左傳曰殺人不可為賊又毀則曰賊 矣

説文曰盜私利物也 矣 左傳曰竊賄為盜 矣

義寂梵網經疏曰竊取名偷頭棄名劫盜通二也 矣

古多小盗人と白波緑林とあり。是ハ唐土小

白波をいふあり。又緑林ハ盜賊の薙とあり

山の名也。緑林ハ前漢十五主王莽が時天鳳

四年丁巳臨淮娘耶其外荆川より起緑林兵是則

人のおと侵奪と飢饉を厭とる民衆數万人

緑林山のゆふ陰も希く盜竊をなるとあり

盜賊の名とあり。日本の山城乃とあり

白波ハ後漢靈帝の末小冀中の餘黨郭太等復

起西河白波谷遂破河東百姓流轉三輔号為白波

賊とあり白波を海城の名とせり

ハ名汚抄云盜人の下小とあり波とありの林と

下女やち一女のりのとも 依勢おぼえあること

いしちとありてありり

愚見抄云まの字とあり

肖岡云強の字とあり

お小つとあり



常あそむ女の相ひこづくしとさうしな  
ふしと云々此後ふくむけり  
実澄云此女のしもむくつらふらふのむしを  
とて南阿蘇に女をひきこむと云ふもむしを  
くくもつらむをわらふと云ふ

名目抄云本相と云史記云毒と云

▲シま<sup>シ</sup>燃<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>柄カ 燈<sup>テ</sup>扱<sup>コ</sup>り<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>柄カ

▲シ合<sup>シ</sup>ぬ<sup>シ</sup>信<sup>シ</sup>乃<sup>シ</sup>腕<sup>シ</sup>ぶ<sup>シ</sup>と 此語ハ妙樂大師の十五并益の

一也 十連鈔云可嫌物事法師之腕立夜行之高

声出仕之長刀 文畧

▲シも<sup>シ</sup>休<sup>シ</sup>施<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>利<sup>シ</sup>劔<sup>シ</sup>や 山姥小僧と

▲シ愛<sup>シ</sup>染<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>方<sup>シ</sup>役<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>弓<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>矢<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>け 放下病小僧と

▲シ多<sup>シ</sup>同<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>路<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup> 鞍馬天狗小僧と

▲シさん<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>愛<sup>シ</sup>著<sup>シ</sup>慈<sup>シ</sup>悲<sup>シ</sup>心<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>達<sup>シ</sup>多<sup>シ</sup>ガ<sup>シ</sup>逆<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>僧<sup>シ</sup>と

枕ふ少々の名根ハ提婆がみ逆ふりも魚と云ふ

名義集云提婆達多亦名調達亦名提婆達塊法苑

云齊云天熱以其生時人天等衆心皆驚熱益性撰

論云唐云天授亦云天与謂從天乞得故矣

五逆者隨身鈔云一殺父二殺母三殺阿羅漢四出

佛身血五破和合僧此小乘五逆罪也大乗五逆罪

者一破壞堂寺焚燒經藏二謗三乘三於一切出家

人若有戒若持戒若破戒打罵呵責四殺父殺母山



佛身血破和合僧殺阿羅漢五捨益因果也此云五  
在間業矣 提婆達多ハ阿闍世を子とて殺め  
父母を殺さしめしり 殺るは比丘尼を殺る  
此の如きより血を吐し和合の僧をやぶる  
りら魚人なりしり 法苑乃舎教引く  
成仏し終ふ

▲方便の殺生ハ菩薩の六度小をさるる  
慈悲の爲ふより殺生ハ功徳小なりと

菩薩戒經曰以憐愍心而斷彼命矣

菩薩六度者六波羅密也一檀波羅密二尸波羅密  
三羼提波羅密四毘梨耶波羅密五禪定波羅密六

般若波羅密以唐言訳之即布施持戒忍辱精進禪  
定智慧是也名義集及法界次第小なり

▲さんいんの師といふを師とせんとす

南本涅槃經二十六曰願作心師不師於  
心身口意業不與惡交矣 宗鏡錄曰寧作心師不

師於心若師心則墮六趣而不返作心師則冥一道  
而常皈矣 章安疏曰願作心師有二解一云只是

前後兩心前心起惡後心隨流者此非心師前心起  
惡後心能止是則心師二解以假入制心不隨心作

所作假入人是心師今明太近上文云諸佛所師所  
謂法也心緣於法法為心師淺深自在矣







盛衰記小弓を妻手と云。丹生津媛記云矢手  
取持トリモチ云云。或云弓よ矢よとちりては

叔も之隙の者次信キチジノブ多とて令をゆさる商人  
もく毎多教多の室とありめくも

作く奥へりり 此後よ者次信多と作りあり

異本小之系橋次季春スエハルと云。ち平記小之系  
橋次末春と云。作く不同と。世傳妙心寺の山本

本過村と云ゆり。是橋次季春と云。一本小之系の  
あり。此而を本過と云。一平小之系

の橋次が作と云。四の定りありと云。  
高荷タカカと作るとい橋次が所相と。奥とい奥多と。

奥川奥川の金の多くありふると云。橋次種との代相と  
ゆく令ふり。是とゆさる。作く令商を

と云。異本義經記云三条橋次季春と云。金商人  
あり。後堀弥太郎景光カチミツハ此季春と云。且も

奥川へりり者ヒテ衡ヒラが方へも出入と云。遮那王橋  
次が系信多小眠シメヒと云。

平治物語云堀弥太郎者義經赴奥川時所伴金商  
人吉次者也ヒナキチと云。

河内の足柄カガサヅ磨スリ汁シを高見才ハありてお小の糸イトは  
是より下は者モリ尤モト等張ハラ契チがよ下の造と

表ウラおといウラ叙術シヨの達者タツなりとのと云。



河内小倉の系女小波と

三多の御門壬生の小櫓 壬生ハ在大宮西四条

南宝幢寺と号と。又心淨光院光院小三井寺

ありと。存るハ地蔵菩薩之定朝定朝の作也。毎

年三月大念仏あり。又此所の人民集り

まをすつとむらり。其仲小櫓の徳と誇り

るあり。ね言ひまをすつとむらり仲小櫓を

乞ふなりとくく盗人の多と壬生の小櫓と

呼し壬生の氏の時時に流くともふ一。名前の

時の流り一

大さりのの上と分切 是等盗人の系流り

加賀一

▲板小倉の越前の浅生浅生のね義之太の九郎

越前國ハ小波小波と。之小も浅生も越前也。

浅水浅水がま。あさむらとくあり。倍小あさむ

つとくも。盗戒盗戒とあり。倍小

夫あさむらの橋の懸後とてとるくともるを流と

▲加賀國 佛系小波と

▲志まのの 源氏常本とて志まののり相

せんともく。花鳥録情と志まののといふ

ものといふごとく一ともく。

孟津抄と志まののの瘰の字とく

熊坂

土







来く或は山為小障蔽と有り。又小此為圓頓  
 止觀の文と漏一々色バ鬼神悉く退散す  
 うし文畧 今案 唐韻曰厄災也又阻難也困  
 也 漢書曰一元之中陽厄五陰厄四陽為早陰  
 為水 註云一元四千五百歲為一元 矣  
 是世の人乃多身の厄難とも之也 陰陽二の  
 中陽厄を撥つるく一陽之陽厄神と云  
 獅子奮迅虎乱入飛鳥の翔乃もとくこと  
 是の法のもの乃多也 法華涌出品曰諸佛師  
 子奮迅力 矣 太般若五十二曰師子奮迅三昧者  
 於諸垢穢縱任弃捨如師子王自在奮迅奮迅振毛

羽狀 矣

大明法敷曰師子奮迅者借譬以顯法如

世師子奮迅為三事故一為奮除塵二能前走却

走捷疾異於諸獸此三昧亦如是 矣

或云兵法書小源義經虎乱飛鳥翔の秘術と書せり

今この戸田山崎が兵法の手也

一云新陰流兵法小燕飛と云ふ有り。又林氏

流小鳥飛と云ふ有り。是等飛鳥の翔の法

等一々

其外手とひちた刀を捨具是とくもり也

張契と初めも下乃者尤 判官夜小切と云ん

ふ度小切と云ふも小持と云ふも云は



肝とけーーる伴成ー

具是ここの武具の如名こ。 鴉鷺記云五百騎

がまのされ小すこむと。目小のまの経乃大具

是丸閉りーまこくけいさこ

▲盗も命のつりここあまうまうやひんそ

つろまろくこあまうまうま小同ー

つろかりーろまどろるあまうま

校類こ。本の後小水と。末の沙汰こま

なり。修く校類こま。ち平記小義校類

ま。徳のまの指次が為物小目とけむ

知ふぬまむべこ室いんも有べー根

本の命がつりここまあまうま

つろこ。校類の名。漢文小も。以書小も

記表記云子曰君子不以辞及人故天下有道則行

有枝葉天下無道則辞有枝葉矣

ーろめこもひまろろが 伊勢相濃云若男

色このまろろ女小ゆこりり。ろーろ

ろろやありひんこま 愚見抄云じろ

ろろのま心えなりこま

ま字本小後月痛とま 古今抄小影護と

ま。河海抄小影護とま

後後格

○尻くちの里の女影記じろめこもゆり今自然 辰系 元真



▲おくしらの冠者が 冠者といふ人多うど。

ふき冠の若者といふ。桐つ木の妻小源氏

冠服の好冠者といふ。え服して後縁の

定よりする冠乃あまき人と冠者といふ。

又官者といふ。まづひといふ。職原抄小

官者の内侍と云ふ。天子のつゝ小

つういふといふ。但定少くは冠者の方を

用ひし。おくしら一物ある人といふ。

▲折妻戸と云ふ。一物折の妻戸

或ハ二枚折の妻戸といふ。葵のうら

たぐひつらと侍らる。或ハ兵法軍制

務員の時。敵乃後と云ふ。肝要と云ふ。兵法は

侍不待不掛長短。回と云ふ。ゆり水等と

あくまをいふ。

三十一

三十一

三十一



和意<sup>和</sup>を以て後<sup>後</sup>に<sup>に</sup>の<sup>の</sup>ひ<sup>ひ</sup>。終<sup>終</sup>ふ<sup>ふ</sup>希<sup>希</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>久<sup>久</sup>。  
且<sup>且</sup>後<sup>後</sup>の<sup>の</sup>契<sup>契</sup>締<sup>締</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>。牛<sup>牛</sup>を<sup>を</sup>若<sup>若</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>  
終<sup>終</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>き<sup>き</sup>り<sup>り</sup>。并<sup>并</sup>を<sup>を</sup>長<sup>長</sup>刀<sup>刀</sup>と<sup>と</sup>換<sup>換</sup>え<sup>え</sup>。  
く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>海<sup>海</sup>小<sup>小</sup>舟<sup>舟</sup>を<sup>を</sup>ひ<sup>ひ</sup>刺<sup>刺</sup>し<sup>し</sup>。小<sup>小</sup>牛<sup>牛</sup>を<sup>を</sup>終<sup>終</sup>ふ<sup>ふ</sup>修<sup>修</sup>を<sup>を</sup>  
入<sup>入</sup>じ<sup>じ</sup>と<sup>と</sup>治<sup>治</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>。若<sup>若</sup>を<sup>を</sup>治<sup>治</sup>め<sup>め</sup>る<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup>。并<sup>并</sup>を<sup>を</sup>  
是<sup>是</sup>と<sup>と</sup>感<sup>感</sup>ぜ<sup>ぜ</sup>し<sup>し</sup>。牛<sup>牛</sup>を<sup>を</sup>無<sup>無</sup>法<sup>法</sup>の<sup>の</sup>達<sup>達</sup>人<sup>人</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>  
地<sup>地</sup>の<sup>の</sup>足<sup>足</sup>下<sup>下</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>。秘<sup>秘</sup>術<sup>術</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>終<sup>終</sup>る<sup>る</sup>  
を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>終<sup>終</sup>極<sup>極</sup>な<sup>な</sup>と<sup>と</sup>が<sup>が</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>可<sup>可</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>力<sup>力</sup>の<sup>の</sup>  
良<sup>良</sup>掌<sup>掌</sup>の<sup>の</sup>術<sup>術</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>安<sup>安</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>終<sup>終</sup>ふ<sup>ふ</sup>終<sup>終</sup>極<sup>極</sup>の<sup>の</sup>道<sup>道</sup>  
なり

△麦の而<sup>而</sup>廊<sup>廊</sup> 而<sup>而</sup>廊<sup>廊</sup>とい<sup>い</sup>推<sup>推</sup>現<sup>現</sup>達<sup>達</sup>の<sup>の</sup>拜<sup>拜</sup>の<sup>の</sup>屋<sup>屋</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>

麦<sup>麦</sup>少<sup>少</sup>く<sup>く</sup>い<sup>い</sup>た<sup>た</sup>哉<sup>哉</sup>へ<sup>へ</sup>の<sup>の</sup>而<sup>而</sup>の<sup>の</sup>廊<sup>廊</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>か<sup>か</sup>へ<sup>へ</sup>ー  
か<sup>か</sup>け<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>指<sup>指</sup>毒<sup>毒</sup>水<sup>水</sup>の<sup>の</sup>月<sup>月</sup>を<sup>を</sup>婆<sup>婆</sup>の<sup>の</sup>足<sup>足</sup>下<sup>下</sup>に<sup>に</sup>た<sup>た</sup>し<sup>し</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>  
と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>なり

七書尉<sup>七書尉</sup>繚<sup>繚</sup>傳<sup>傳</sup>曰<sup>曰</sup>輕<sup>輕</sup>者<sup>者</sup>如<sup>如</sup>霆<sup>霆</sup>奮<sup>奮</sup>敵<sup>敵</sup>若<sup>若</sup>驚<sup>驚</sup>カ<sup>カ</sup>矣<sup>矣</sup>

●月<sup>月</sup>小<sup>小</sup>舟<sup>舟</sup>を<sup>を</sup>ひ<sup>ひ</sup>刺<sup>刺</sup>し<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>月<sup>月</sup>の<sup>の</sup>中<sup>中</sup>の<sup>の</sup>桂<sup>桂</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>

△夕<sup>夕</sup>涼<sup>涼</sup>け<sup>け</sup>も<sup>も</sup>若<sup>若</sup>涼<sup>涼</sup>なり 湯<sup>湯</sup>谷<sup>谷</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>



鉢木

正五位下相摸守平朝臣時頼拒武天皇十代後亂  
 北条遠江守平時政五代後葉也父修理亮時氏と  
 号も母秋田城介景盛女也下禪尼と号も  
 の副將軍として古今無双の賢將なり建長八年十  
 一月廿三日相摸山内の最明寺にて落落あり法名を  
 笑る房カクシウボウと改む世に最明寺とあり山内最明  
 寺ハ後々を以て禪興寺と乃宗家の建立に引け取  
 最明寺名を慕ふ也東鑑云弘長三年十二月廿二日  
 成刻入時於年三十七而明寺の北亭より卒未條  
 次の後著衣裝裳也繩床座禪一聊動搖の氣

鉢木

一



頃云業續高懸三十七年一植打碎大道坦然と  
 同廿三日は葬礼す 文畧 時に入及の政及煙非分明  
 かくを凡てびあらしむる民昔はのあひとあり  
 されは法家のち後人地政者 邦欲進及のこるを海濱  
 更に決せざれば 時に入及をと強とせよ 愚達私欲  
 の者 或は徳友の嘗死 飛とあつる 自ぬ知つてい  
 へば 私徳うすく 政及 叶うたぐ 今ハ嬌子附字成を  
 しく 政務よしく 一 度 度 度 の男をいハ 政と致りな  
 さのこあやかりしとて 其力一字よとらしりあ入  
 の人々ハ ち低な馬の 後徳 二階堂入及るふう 只二人よ  
 極て 文畧二年秋の末 傷よ死をと号し 徳ハ 二階堂一  
 人石具し 一ひやく小徳会と志のひが六十余歳と修り  
 一徳あつて 二三年 存とあくと 廻徳ふ 徳を時教の  
 葬送進徳者よの中いあかてあひ徳ハ 徳廻徳の  
 徳金とゆくと 徳人のあつとて 一徳ハ 徳人徳とあ  
 ひくあつても 徳とて 徳条九代記 取意  
 徳定ぬたふいあ 一徳とて 徳とて  
 此 一徳とて 徳とて 徳とて 徳とて 徳とて  
 是ハ 一徳とて 徳とて 一徳とて 徳とて 徳とて  
 徳の 一徳とて 徳とて 徳とて 徳とて 徳とて  
 信法ハ 一徳とて 徳とて 徳とて 徳とて 徳とて

徳

徳







豊城命四世孫奈良別初賜国造云大和本紀云上野下野とい彼兩國の中間は依野カサカサ無野カサカサとして二の野系あり。其野中より河あり。後瀬セと号す。又依野の中河とて是あり。此野と一方は号しヨスいふ狭を坂よ。彼西野の中なる後瀬河を境と。あまよふ川。仍河よりあるを上野と云。河より東を下野と号ツケとる。又野の西とよむ野。野より東と下よ野ツケ。上野下野とい。依野の字を治るといふ。いふ文よハ此を。つきのよみハ依名カサのよみ。又義タキよみとてつげと云々。或云若ハ上野下野として毛の字を添ふ。毛とい有田ウラ云毛ト後テ毛の字を添ふとい。字彙云毛草也云穀梁傳曰凡地之所生謂之毛云

▲あふ川アハカハなる名ナいふよ世よある人の面白ういふ人の面白ういふりアハカハ。後然コトなる名。類抄云 鈿粉 玉塵 恒コト類と云 説文曰雪冬雨云大載礼曰天地積陰温則為雨寒為雪云五経通義曰陽則散為雨水寒則凝為雪霜皆後地而昇者也云面白と云類ハ之怖コトは後也

▲雪ユキ似鵝毛飛散乱人ハ被鶴カサ皚立徘徊云此待マツ面白文集二十三卷ニあり。鵝とい鳥の名。











粟の食ハツヒ一と食物云 公孫弘傳云身食一  
肉脱粟飯 又云晏嬰相魯時食脱粟飯

▲此の世の如く一に世のありし内はよき人侍は  
和漢のよき一の文よ。粟飯の多し。注代を  
一も粟飯の注あり。粟するよ上右の文とるふ  
糸の注はるく一と只。粟を因より。若し糸と粟  
とつひらる。文粹第一源順待花色如蒸粟  
世帯花よはる

▲万 〇ふ早振林の注一なるせい表目の冊色よ粟  
実や魚生が片一なるの受ふ十年の耶耶の飯  
此 迦耶耶よはる

▲身 〇も若をんらあふ麩ももあふ  
世傳最明守者粟飯が一実を。成は移り注んも  
夜さむと。月もあふんば二階堂よひらうよ  
実で注ひる

▲其 〇秘の書よふいあふ一を注はるつら  
某が秘書よふい 書注曰某名也臣諱君故言某  
凡不知名与不敢行其名者皆曰某 祖庭事苑云  
某如耳木上指其实也然犹未足以定其名 秘藏  
涅槃經疏曰隱故名秘覆故名藏

▲仙人よはる一書心の書つてはあふ  
是ハ世の周位の時者よあふ。仙人よはる



一、つとむとつり 仙人者 釈名曰老不死曰仙仙  
 遷也遷入山也故制字人傍山也 楞嚴經曰有  
 十種仙皆壽千萬歲數尽後入輪迴為不曾了得真  
 性與六道衆生同名七趣是皆輪迴中人也 寒  
 山詩云鏡汝得仙人恰似守尸鬼 雪山者 西  
 域記云揭職國雪山王城西北二百餘里至大雪山  
 山頂有池清雨祈晴隨求果願 山谷高深峯巖危  
 險風雪相繼盛夏含凍積雪彌谷蹊徑難涉山神鬼  
 味暴雜妖崇群盜橫行殺害為務 矣

▲忘の極乃水面の雪封してさむさむも

和漢朗詠集云藤原篤茂詩云池凍東頭風度解窓

梅北面雪封寒 矣

▲ふとくふ人狂うくれ山里のけけ垣の梅とくま

。山里のけけ垣の梅乃をいつる人のふとくふ人菅家

▲家搦さうくくひさくくはるさくさく

連さる後抄云家搦のけ又春永さくの搦くく

一はくくあつとく搦とひ里よあつとく家搦とく

くくく ひとくくく南麻よ後と

。新古 垣くくはるあつとくの家搦花散ゆりてあつとく

▲ねの本外搦とて藪とるもゆりや

ねの煙といえ本ねの信本の中よ。ね本搦の多と

のく。後くね漢たよねのゆ煙とひく黒よ他也。



侍も身も松の煙を泳ぐるに。き心のねまを  
と煙よこして。松の煙とつらう。能文墨を  
或はよまをみどり。松の煙とつらう。能文墨を  
長ていひ。松の煙とつらう。能文墨を  
そら。松の煙とつらう。能文墨を  
一夜松の煙とつらう。能文墨を

▲みうごりの侍のこころのあはれあり

玄旨百人一そ。松の煙とつらう。能文墨を  
者。松の煙とつらう。能文墨を  
侍。松の煙とつらう。能文墨を  
侍。松の煙とつらう。能文墨を

▲是松の煙とつらう。能文墨を

源氏。松の煙とつらう。能文墨を  
三良政。松の煙とつらう。能文墨を  
あり。松の煙とつらう。能文墨を  
あり。松の煙とつらう。能文墨を  
あり。松の煙とつらう。能文墨を  
あり。松の煙とつらう。能文墨を  
あり。松の煙とつらう。能文墨を  
あり。松の煙とつらう。能文墨を



辛卯と押成せしれ。上秋の男と成果の。秋の歌と縁  
らひと尤。かたけい多勢。秋のひとりとて。この力なるが  
決成るるといふこと

△<sup>早</sup>おのれいれとて経念(示)りてまは沙汰いひりぬ  
國のありあの宛めり後さへ修りよはるひといはれ

玄明寺後さへは遊去(ヤキヨ)て。浮定流の宛居るれば。ま  
は海張(セウ)りた。いりぞそ甲斐(カヒ)いへとて。孝世がひいりて

此、唄よ最明ち後さへ修りよはるひといはる。おまゝ

沙汰者 音多曰沙汰別如沙中瀆洗其金取精妙

兵 杜子美上韋九相詩沙汰江河濁集注曰沙汰以

篩(シラ)去其細而存其大曰汰 兵 とい沙とてはて細る

と云り大なるとあつてむこと。理地分的に希るぞ是

▲着到よけき 是か書孫も 有我簡見抄云國

勢(セウ)云ふのほふ。年号月日何の國勢と到くと是と  
えて。惟(タシ)後幾十騎。幾百騎。惟(タシ)後幾十騎と云。

▲只頼の我世中ふりしんり 田村よるす

▲さうらる法師あり 是は玄明寺後の宛なるを。自(ジ)が  
法師といふるは。佛と。業と。いはるの本文は法師とい

得く。昔も志く。昔もいりて。いりて。いりて。いりて。いりて。  
言(コト)い多世が海(シ)切の答(コタ)を採(ヒキ)英(ヒコ)とていりて。又

▲公方の縁よりのりせん 公方と云はるは。玄明寺後附けの縁也



或云應安七年九月將軍義隆の御子多瀨公は自西國内海一  
路入則天下泰平以後永世不替の長後赤融院初て  
將軍の亭へ御幸成て赤後と任太政大臣自是号公  
方其後二十八歳入御し号鹿苑院道義ト 夫是  
武家と云方と云るは是より始り也

▲東ハケ国の大名小名 坂東ハケ国の盛久は源氏  
大名小名と云ハ大人の名譽と累呼で大名と云ハ  
異朝への備後と大名と云見在傳 莊子曰若大功  
立大名此朝廷之士也

▲糸色の具足 帝の糸と云く威一なる具足は  
糸と云と云く若ハ革と云く是今の糸乃こく  
かご一なるこ糸と云く綴一なる故糸色と云  
糸の色ニ色と云く一なるとニ色と云く一なる  
くそたあめと云く 唐韻曰障泥鞍節也 西京

雜記曰玫瑰鞍以縁地錦為蔽泥後稍以熊罴皮為  
之ラ 延喜式曰凡罴皮障泥聽立位以上着之ラ 兵  
▲是ハ車 湯谷は源氏

▲きく星のこくくくくくく 平勃滕王閣序曰雄  
別霧列俊彩星馳臺隍枕夷夏之交上下畧

▲月とひさ指と云く一ハ 日本紀云美女之睪兵  
同私記注云睪視貞也兵

▲さび長刀やうのくは横一 或ははさうのくハ揚腰と  
本木











一 歌後拾遺 丁未年三月 月夜の又りよのいよしよの  
同年三月廿日 経念よゆり給ひて。お換守者(ア)も  
おしよして。彼後家とめしよし。又の卒(ホ)をト  
し給ふとく  
已上 畠山土岐  
作 貴家日記

握々

周しゅうのふ乃の傍かたがは羊やう唾たと云所ところよ禹ウ鳳ホウと云者もの。姑こと市いちと建  
て酒さけと賣う。常つね小こ心こころ直ただかしく利り潤じゆんと云。次つぎゆりよ次つぎ  
ましく酒さけと買かひりのり。婆おや多おほの人ひとよあしと。面おもて色いろ知しかて  
うらりく。政まつりい荆棘しげきのこころ。又また酒さけと飲のみり。又また  
禹ウ鳳ホウ問と云い。汝なんぢいづくの者もの。名ない如何いかと問と。名ない。い。と云  
慎しんむ。と云。大海たいかいの政まつりよ。任まか握にと云者もの也なり。明あき文ぶん海かい陽やうのい  
色いろよ。あし。我われと侍まじべし。と云ひて。夫そのぬ。教しゆのこころ。海かい陽やうの  
い。小こまて。尺しちさ。い。彼か。化くわ生せいの者もの。海かいる。をく。まて。大たいと云  
龍りゆうと抱いだて。淡たん色いろ小こと云。あし。と云ひ。舞まて。酒さけと云。い。其その  
後のち。此こゝ。遜すん小こ條じょうと云。と云。て。禹ウ鳳ホウ小こゆ。と云。り。家いへ小こゆ。と云。り。

星々



彼、醜と云ふは、ユキチウ酒壺中、小くくへり。條の多と  
門乃色よきて。此、酒と云れ、たつと云。飲人、齡とのべ  
病と云ふと云り。禹、風たのひささく。羊、唾の  
市、小と云ひ、小くくへり。已上、庭訓往來之抄古注  
文畧

本草、綱目云、時珍曰、猩々、出哀牢夷及交趾封溪縣  
山谷中、狀如狗、及猕猴、黃毛、如獾、白耳、如豕、人面、人  
足、長髮、頭、顏、端正、聲如兒啼、亦如犬、吠、成群、阮汧曰  
封溪、俚人以酒及草履置道側、猩々見即呼人、祖先  
姓名、罵之而去、頃、後相与嘗酒、着履、因而被擒、檻而  
養之、將烹、則推其肥者、泣而遣之、西胡取其血、涂毛  
鬣、不黧、刺血必筮而問其數、至一斗乃已矣

礼記云、猩々能言、郭義恭、廣志云、猩々不能言、山海  
經云、猩々能知人言、三說不同矣

▲ギンザン金山の麓フモト

か、祿命と云ふ、唐土小徑、山と云ふ、もあま、此、と云ふ、令  
乃、字の令と云ふ、あり、と云ふ、と。大明一統志卷  
十一、云中、都鎮、江府、金山、在府城西北七里、江中、宋  
周、必、大筆、錄、此、山、江、環、繞、每、大、風、四、起、勢、若、浮、動、唐  
有、裴、頭、陀、於、此、開、山、得、金、賜、名、金、山、矣

私、云、一、統、志、と、云、る、小、唐、土、小、金、山、と、云、ふ、凡、十、六、ヶ、所、を、  
今、復、小、く、と、云、ふ、令、と、云、ふ、は、何、れ、也、歟、と、云、ふ、り

▲ヤウヂ楊子の里ウラ、ウラと云ふ、民、あ、と、云、ふ



揚子の里ハ揚民府の揚子江と云歟。庭訓抄小羊唾とあり。又々々々も禹鳳と云。一統志卷十二云中  
都揚列府揚子江在義真縣南經通泰二列入干海  
矣。私云令公ハ在法ハ府揚子江在揚列府終ると令  
公の條と云ふ。お遠せら秋。但一統志の條と云ふ。小揚列  
府法ハ府お並ひし。程々ぬへー

叔も我報小孝ありふり

爾雅云善事父母曰孝矣。孟子曰仁之實事親是也矣。曾子曰孝慈者百行之先莫過於孝。孝至於天則風雨順時。孝至於地則万物化盛。孝至於人衆福来臻矣。

揚子の市小物と酒とを賣らるる

説文曰市買賣所之也。又凡貿易買賣皆曰市矣。史記云神農氏教人日中為市交易而退矣。宋吳処厚青箱雜記云嶺南人呼市為墟。巷市之所。在有人則滿無人則虛。而嶺南村市滿時少虛時多。故謂之墟矣。柳文云越墟人矣。林代考云一書云天照太神天磐戸小入夜晝のりのちらるる。八十万の神と云のる市小神つとふつとひはるる。是法林集會の多と。此等日本の市乃と云のるん。時去時來と云る。史記封禪書曰時去時來則風肅然也矣。



▲今日ハ潯陽の江ノあはく彼程々をさしりやしぬい

一統志卷五十二云潯陽江在九江府城北源自岷

山至此下流四十里合彭蠡湖水東流入海矣

▲老せぬや茶乃多きも葉のあり

古 ありさうくわくわくん葉のむ老せぬ林のすーかきと 真瓜

▲見さくさく名もこくろりや秋風の

新茶の連ふの夜向ふ

一秋乃月名もことりりのえらる

秋のまより三季小あつたは名もびや秋といつけり

酒と之まといふをまきまき之或ハ三寸三本共也

古酒記云三季ハ酒のむ本とゆりまきこと耐小酒り

夏清りゆく三季しふたき 以次第共酒訓三

寸者飲酒則邪風去皮膚三寸矣 岷江不楚云三季

といをゆりてまき藝一夏のむく仍之季と云又

三寸といは酒とのめば粒気三寸身小らのつらとすと

と云いふるさとも四寸五寸と云又之本といは社康

と云者の妻男の外へりる回小男の目くの飯と

榮木のともやうく小りるるをりる小ぬる小りるい酒

とみりるく是と樹伯小あつたき

日本紀私記云神酒和詔美和矣

呂氏春秋云狄儀作酒醪變五味矣

戦国策云昔狄儀作酒而美進之於禹矣







説文曰限水曲隩也

尔雅云厓内為隩厓外為

隈矣

月星ハ隈も有りといハ星も有りとい

塵添塏農鈔云月のこまなるまじくといハ星も有りとい

海の曲らる所と云ふも教小成不の名ハ阿の字

とい庭曲と教ハ限の字とい名の曲也といハ

新羅社哥合

▲芦の葉乃笛と吹

笳ハ阿志布惠とい

廣韻曰笳北方之人卷芦葉而吹矣

事物紀原曰杜摯笳賦序云昔伯陽避乱入戎懷土

遂建斯樂矣漢舊録曰胡人卷芦葉吹之故曰胡

笳亦曰李伯陽入西戎所造矣

李陵答子卿書曰側耳遠聽胡笳互動牧馬冰鳴晨

坐聽之不觉淚下矣笳ハ胡人の吹所依て胡笳とい

▲波の鼓

白糸夫小記と

▲秋の調

律の調ハ品とまとい律と秋とい又ハ絶

調平調大食調等皆秋の調子

狭衣 志のありと移りて今宵とい秋の調のありのありと

▲百代との竹乃葉の酒

文選註曰竹葉酒也

百詠註云宜城出竹葉酒矣本草綱目云竹葉酒

治諸風熱病清心暢意淡竹葉煎汁釀酒飲矣

故實名目云昔竹葉と云ふの本乃らるりかの酒水

漬して酒と化りおせり其の本の木の根の本と



握々  
 竹乃小指スギと云ふは此也。又、海と云ふは此の竹  
 の本乃る也。竹を切て之も是と云ふ  
 或云漢朝小劉石と云者モリ繼母我カウ子コの者コキ飯食  
 を切て劉石より糟糠カウの飯と云ふ。劉石と云ふは食  
 一と本の股小指ヒタ。自知小水落ヒツ積ツキく候カウ。一りり  
 ぐれ、劉石試之シ。其味ヒ美也。竹を切て折シて後ノチ、国  
 王オウは蘇ソと周シュウと云ふ。竹を切て一ヒトと云ふ  
 〇竹乃る竹タケの竹タケの竹タケと云ふは此の竹也。隆季  
 〇此竹は海と云ふは此の竹也。折シて之も是と云ふ。先マ准ジ  
 矢ヤは小指スギと云ふは此の竹也。折シて之も是と云ふ。先マ准ジ

明和九年 壬辰 首夏

書目林

- 京都 堀河通高辻寺町
- 京都 錢屋七良兵衛
- 京都 醒井通松原上町
- 京都 鍵屋源兵衛
- 大坂 〇齋橋南四丁目
- 大坂 吉文字屋市兵衛



